

# 最終講義「社大での日々を振り返って、そしてこれから」

藤岡 孝志

## Looking back on our days at JCSW and looking forward to the future.

Fujioka Takashi

皆様のおかげで、この日に至ることができたことを、まず心から感謝申し上げたいと思います。そして、この場をご準備いただいた皆様に、心からお礼を申し上げます。

そして、身に余るお言葉をいただきました学長、そして学部長に心から感謝申し上げます。短い時間ではございますが、私のこれまでの 22 年にわたる社大でのさまざまな思い、その 22 年間で培ってきたことをお話しさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### 1. 社大での教育

まず社大における教育が職務の根幹、中核です。学部生の方々、ゼミ生としては 278 名、これは 3 年生を含んだ数ですが、みんなと一緒にこのゼミをつくってきたということを改めて感じています。ゼミ合宿に行ったり、それからミュージカルを観に行ったり、ゼミ合宿もよき思い出です。これは学部だけではなく院生の方々とも、そういう時間を過ごさせてもらい、互いに学問を切磋琢磨してきました。

本学独自の課程である CSW 課程については、設立されて間もない頃から関わらせていただいて、600 名を超える実習生と関わることができました。これも一重に CSW 課程の先生方と一緒にできたことを本当に心から感謝申し上げ、皆さまと一緒に学生の実習、そして教育をこの 22 年間させていただいたことを改めて、お礼と感謝を申し上げます。

そして教育で大事にしてきたことということで、この機会にまとめさせていただきました。まずは一人ひとりの生きてきた歴史を尊重し、一人ひとり丁寧に向き合うということを心がけてきたつもりです。十分なことはできなかったと思うのですが。そして、さりげない声掛けを自分なりに大事にしてきました。どのタイミングでということではなく、ここで声掛けが必要だと思ったときには、そのようにさせていただきました。今日の調子はどう？とか、言葉にも気をつけながら関わってきました。そして、ゼミですが、まず何よりも浮かぶのが『そこにいるだけでいい』という思いです。いろいろ体調が悪くなったり調子が悪くなったりして、大学に来れなくなったりする学生さんもいらっしゃるのですが、しかし、そういうさまざまな背景がある中で、とにかくまずゼミ室に来てくれているということで、そこにいるだけでいいんだよというところから、われわれは教育を始めなければいけないのではないかと。その中で、例えば語りたいたことがあれば語っていいと。つまり「語る自由」もあれば「語らない自由もある」。その語らない自由も保障する

ということを大事にしてきました。

おかげさまで本当にそこにただでいいよということで、毎週卒論の進捗状況を聞いたときも、「進んでません」、「進んでません」と言うのをずっと繰り返した方がいらっしかったです。それが最後のほうになってきて、頑張っすごい大論文を書きました。やはりそこにただでいいんだという、その思いが伝わったんだなと思いました。他の学生さんのいろいろな語りも聞いているので、いればそこで聞けるので、やっぱりゼミの良さというのはそういうところにあるかなと思っています。

そういう意味で、いろいろな物事や卒論が進まないよりも、人それぞれ生きることを前提として一生懸命生きているので、やはり大事なことがいっぱいあると。そして、そういう中で『唯一無二の自分』が書く『唯一無二の論文』だということを非常に意識しています。卒業生のテーマを見ていると、子ども家庭福祉領域の歴史が分かるのではないかと思うぐらい非常に多岐にわたっています。そういう中で、そこに向き合うことで、『学生の個性が光りだす』ということを非常に実感しているところです。

そして実習教育において大事にしてきたことは、『現場でしか分からない真実がある』ということです。その真実に真摯に向き合って、実習を通して、学生は自分を磨くしかないということです。そして、実習先はこれから生きていく職業的なモデル、あるいは生き方のモデルがたくさんそこにいらっしやるということで、『モデルの宝庫』ではないかと。実習の良さ、大事さはそういうところにもあるかなと思っています。「先輩の後ろ姿に将来の自分を見る」ということです。実習教育について、非常に強く感じたことの中で、『実習が学部教育の要である』ということを変更してここで共有できるとうれしいなと思っています。

## 2. 学内での職務から学んだこと

そして、さまざまな部署で大学での学内の役割を通して多くのことを学びました。一つひとつの役割が『初めて』という感覚で、教職員の皆さまと一緒にさせていただきました。『仕事が人をつくる』ということを非常に実感しています。むしろ、変わっていく、あるいは「未熟な自分に直面する」ということの中で、仕事の中での教職員の方々と力を合わせて、いい仕事、あるいは難しい仕事ができるということを思っています。今日は、事務職員の方々もたくさんいらっしやっただいて、本当に同志といえますか、戦友のような思いと一緒に仕事をさせていただきました。『自分に求められていることに、自分の思いを込めていく』ということは、常に考えながら、仕事をさせてもらいました。そういう中で自分の主体性とか自分の感性を大事にしていくということ。求められていることに、いかに自分の思いを込めていくのか、そのためには求められていることを意識化しなければいけないということがありました。とても難しいことです。さらにそれだけではなく、自分の思いを込めていくということが、ずっと意識してきたことかなと思っています。そしてチーム〇〇を心がけるということで、これは本当に教職員の皆さまがたのおかげで、チーム学生委員会とか、チーム研究所とか、チーム実習センターとか、チーム大学院とかそれぞれの部署で皆さまと一緒にさせていただいたということ、本当に心から感謝申し上げます。そしてこれを言うのは少し恥ずかしいのですが、『自分の意見を言う前にまず

相手の考えを聴く』ということも心掛けてきました。十分なことはできませんでしたが。

座右の銘ということで、礼節と敬意を忘れないようにということも心がけてきました。図らずもバーンアウト研究の世界的な第一人者でいらっしゃるクリスティーナ・マスラック先生にお目にかかる機会があり、職場でバーンアウトが起きないコツは何かと聞いたときに、『礼節と敬意である』ということをお聞きしました。この礼節と敬意ということを根幹に据えながら仕事をしていくということに意を強くし、非常に励まされました。

地域支援や国際貢献のことも関わらせていただきました。特に、地域の施設・児童相談所・子ども家庭支援センターから多くを学び、そして、海外での研究（アジア、北米、北欧、フランス、イギリス、オランダ等）や国際交流（スリランカやインドネシアでの海外スタディツアー等）なども関わる機会が多くありました。感謝の気持ちでいっぱいです。

### 3. 臨床と研究について

#### (1) 研究についての俯瞰

研究については、この後、詳しくお話しさせていただきますが、テーマは広いのですが、私の思いとしては、これは子ども領域に限らないで深いところではつながっている。つまり、例えば虐待のことをやっていけば非行にもつながってくるし、不登校のことをやっていけば発達障害のことにもつながってくるということです。生活困窮についても、さまざま背景が根っことしてはつながってくる。そういう意味での広くということだと。広いからこそ深く掘り下げることができるということで、広く掘り進めればその分深くなるということを実感しています。そして、アタッチメントのこと、支援者支援のことについても社大で深めることができました。そして、今後は意見表明、非行傾向を有する少年への関わりというところも展開していければと思います。

#### (2) 研究と臨床の二足の草鞋

以上概観しつつ、臨床、研究の話に入っていきます。まず「生涯一臨床家」という思いではずと来ました。小学校での出来事があり、つらい思いをしている子どものそばにいる仕事に就きたいというふうにしたきかけとなりました。そして、そのようなことの中で、臨床のほうに入っていました。そして臨床家としての出発として、お三方は非常に影響を受けた方々です。A先生からは、「言うだけでは駄目で、できなければ臨床は意味がない」と、「明晰な思考と習熟に向けての謙虚さが大事である」ということを教えていただきました。それからB先生には折に触れて関わらせていただく機会がありまして、非常にクリエイティブな側面、自分を活性化することの大事さと、人を信じ抜くことということを、後ろ姿からも教えていただきました。そしてC先生からもケースを見ていただく機会がありまして、支援者の存在のありようが大事であること、言葉にすることも言葉にしないことも、支援者からクライアントはしっかりとそれを感じ取っているということをお話していただきました。

3人に共通しているのが『クライアント・センターである』ということと、そして何よりも『たたずまいのすごさ』ということです。この後、お話ししますが、やっぱり『存在』ということの大事さということをお三方はじめ多くの方々から影響を受けたから、この考えに至ったのではないかなということを思っています。

### (3) アタッチメント臨床と支援者支援の融合

そしてその中で多くの出会いがあり、自分なりに深めていくことができたのがアタッチメントであり、支援者支援です。共にクライアントだけでは成り立たない世界を取り上げ、かつみんなでクライアント、あるいは利用者の方々を、そして支援者を支え合うために何ができるかということを探る世界です。その中で『安定したアタッチメント対象、困ったとき助けを求める人としてあり続けるためには、支援者支援が必要となる』ということ。この長い年月をかけてやっとたどり着いた到達点がここではないかということ、まだまだこれからだなと思っているところです。

アタッチメント臨床というのは、そういうあるべき姿を突き詰めているというふうに捉えていくことができるかなと思っています。そして、そこと支援者支援があり、支援があるからこそ安定したアタッチメント対象であり続ける。これまでやってきたことの二つが、いろいろな中で融合したということです。

### (4) アタッチメント臨床について

そして簡単にアタッチメントのことについて触れていきますが、ボウルビィの著作の中にニホンザルが登場します。育児が苦手な親ザルがいると、面倒見の良いサルが育児を肩代わりしてくれるということ、ボウルビィがニホンザルの研究を引用して述べています。愛着対象は母親だけではないということをボウルビィ自身が明言しています。これは社会的養護とか社会的養育の根幹となる考え方をしっかり示してくれていると思っています。

職員の多様性、それから愛着の対象も広がっていくということ。困ったとき助けを求めるということがアタッチメントの考え方の根底にあり、そして養育者の養育行動が子どもたちからの動きによっても引き出されると、『お互いさまである』ということでの相互性があるということです。そして多様な養育者の役割がアタッチメントも根底に据えながらも非常にたくさんのことがある。子どもとのルールを遵守するという。ゲームをどのぐらいにするとか、何時に寝るとか、決められた時間にお食事をしっかり食べようねとかということが『守られている』と捉えるのか、それを『縛られている』と捉えるのかということが、『養育者の存在』というものが関わっていると。枠だけを意識化するとルールを遵守させようということになるが、そうではなくて、この枠の捉え方に思いを寄せながら、支援者あるいは養育者の存在というものが重要となると思っています。

それから、発達障害の子どもたちの気持ちの切り替え、コントロールの難しさということもいわれる。やはりこれは、この人と関わる中でじっくり時間をかけながらも気持ちを切り替えていくということを練習していく。切り替えた先がその人と一緒にとても楽しかったり、うれしいことであれば、こだわりも、もちろんこだわりはあるんですけど、練習をしながら切り替えていく。そして子どもたちの成長は非常に多様にある中で、絵本とか、あるいはさまざまな遊びとかということの中で、将来への展望が開けてくるということを思っています。

### (5) アタッチメント対象となるために

では、その対象となるためにどのようなことを留意すべきなのかということが、アタッチメントの様々な研究・臨床で明らかになってきています。ここでは五つに整理します。

#### ①予測性

一つ目が予測性ということで、子どもたちから見て自分がどんなふう映っているか、どのように予測されているかということ意識していく。これはボウルビイがかなり初期から提言しているところです。ですので、例えば虐待を受けた子どもたちに虐待者の残像がある場合には、われわれがニュートラルに関わっていても、その残像が影響を与えてしまう。われわれがかなり意識的に子どもたちにどう映ってるかということをしっかり構築していくように、プロフェッショナルとしてそこを考えていかなければ、子どもたちにとっての困ったとき助けを求める対象として選んでもらえないということがあるかと思います。特にどう提示するか、自己提示という部分はかなり大事ではないかということをおもいます。

### ②感受性

それから感受性ということは、エインズワースが提唱したことですが、子どもたちのさまざまな表情、しぐさからキャッチをしていくということ。感受性の度合いも大事ですが、相互性が生まれるきっかけでもあります。

### ③有用性

そして有用性は、エモーショナル・アベイラビリティという英語そのものを使う方もいらっしゃる。役立っているかどうかは別にして、役立とうとしているという、この姿勢が、子どもたちにとっても、困ったとき助けを求めるということにつながる。そして逆に、子どもたちの存在がこちらの側に届くことによって、子どもたちにとっても自分が役立とうとするという相互性が生まれてくるということで、この役立ち方の部分も相互性があるということです。

### ④志向性

そして志向性は、『おもんばかり』という言い方をよくしているのですが、気持ちを察したりということができていることによって、声掛けとか、例えば今日、学校で結構きつかったんじゃないかなと思っていたら、学校どうだったという言葉がずっと出てくるので。そのような、おもんばかりっていくということが、とても大事なことではないかと思っています。

### ⑤存在性

そして存在性ということは、これはまだまだ検証がこれから必要になってくることです。存在することの重要性ということが、やはり施設あるいは家庭支援においてもとても大事ではないかと。実際目の前にいる物理的な存在だけではなくて、いないけれどその人のことを語るとか、あるいは自分がいなかったときに、そのときのことを子どもたちから聞くということ。物理的な存在だけではなくて心理的な存在としても、いかに自己提示ができるかということ、あるいは意識ができるかということが、この存在性のとても大事なことではないかなと思っています。

## (6) 存在性—職員の Well-being の探求—

そして最近ではそのようなことを踏まえながら、存在としての職員のあり方の重要性を考えています。もちろん支援技術とか知識ももちろん大事ですが、研修とか、あるいはグループワークの中で留意していることとして、新人、新任層と中堅層あるいはリーダー層、あるいはいわゆる管理職の方々を含めて、少しグループを分けて研修することが最近多くなってきています。それは、語りを共有するということの『語りの場の保障』ということにもつながるかと思っています（職員の Well-being の探求）。

疲労とかストレスに新たに遭遇するということでの語り、それから意外と満足感をあまり共有できてない方もいらっしゃるして、そこを聞いていくことによって語りの場を保障するという。それから、中堅層の方々は疲労とかストレスに直面してくる中で、「分かってはいるけれど、この子が落ち着いてくるにはきっとこのぐらいかかるだろう」と。見通しが立つがゆえのつらさということがあるという、中堅層の方々にはそれぞれのご苦労がある。そしてリーダー層はリーダー層で、非常に多様な役割を取らなくてはいけないということがある。研修の中で一番重苦しい雰囲気になるのは、リーダー層の研修ではと感じています。語りの中で次第に自分たちの抱えている大変さの共有ということが進んでくると感じています。

#### (7)「関係特異性」に着目して—アタッチメントと支援者支援をつなぐ—

そういう中でアタッチメントと支援者支援をつなぐということがとても大事なことかと思えます。特に最近、『チームでの関わり』ということを考える上で、『関係特異性』ということに着目することが大事ではないかと思っています。知識あるいは技能ということでの、このようにしていくということを身に付けることはとても大事だけれど、やはりさまざま傷つきのある子どもたちは、その方法というだけではなくて『存在そのもの』、『支援者の在り方』を求めてくる場所があります。そういったことのためには、その人自身を支えることがとても大事なことかと思えます。

そういう意味で、『関係特異性』というのは一人の人に対しての愛着の対象として成立しても、それがなかなか広がっていかないということです。広がっていかない中であっては、例えば特定の人に攻撃が向かっていたり、あるいは試し行動といわれていることとか、あるいはその人がいるときに限ってルールを逸脱することがあったりというようなことが起きてきて、それも含みであると。つまり、子どもたちに関わるということは、そこに関わっていかねば子どもたちへの支援ということが成立しないということです。しかしそれは、やはり職員の疲弊、ストレス、トラウマティックな体験を生み出すということで、支援者支援はそういう意味でのチームを前提とした中で関わっていくことが大事ではないかと考えています。

これは ZERO TO THREE のほうで整理されています。このような場面で関係特異性、つまり人によって表現の仕方が変わってくる、そういう不安定な状況にある子どもたちがいる。例えば一緒に寝ようねと言っても、(その人ではなく、他の) 何とかさんと寝るといようなことを言ったりとか、それが本当にそう思うと言う。しかし、そういうふうに言われた職員は非常につらいわけですけど、関係特異的な側面なのだということを思うと、その職員のことを支えていくということが大事になってくる。

A さんには攻撃的なのに、B さんにはそれを示さないということがあるということです。A さんへの支援者支援があつてこそ、この子に対する関わりが、つまりチームに関わることは、もう含みなのだということです。そのことが子どもに対する関わりということにつながるんだと思えます。

#### (8) レジデンシャル・マップの実践

そういうところをもう少し見ていくためにレジデンシャル・マップというのを開発してきています。○が子どもたちで、◎が職員です。一つの例は、グループホームをイメージしています。A

さんという子どもは、スモール a とスモール b の職員に対して非常に関係特異的な表現があると。このときに、A さんの攻撃が向かっているスモール a の職員の人に対する支援をすることが、この A さんを支えることにつながると考えています。

チーム養育の中で関係特異性あるいは支援者支援ということが、実は子どもへの関わりへとつながる。このレジデンシャル・マップを活用しながら、特にこれは施設の中ではありますが、チーム養育ということと、そしてチーム養育を実現させる組織全体、施設全体のバックアップのありようがとても大事になってくると思っています。

#### (9) 「人生脚本と養育観」の実践

そして折に触れてというふうに強調しているのですけれど、一人ひとりの職員の方々は自分を振り返ることが大事であると。ただこれは振り返らなければいけないということではなくて、折に触れて子どもとの対話の中で難しいなと思ったときには、自分のことを振り返るチャンスにさせていただく。最近、養育観を職員の方々にお聞きする中で、職員一人ひとりが、今、どちらかという施設に特化してお話しているかもしれませんが、他のアプローチのフィールドでも同様かなと思っています。養育観を共有することで、それぞれの育ちの違いは当然（親も違うわけなので）違いがあっても、それをお互いに尊重し合う、そして共有するというこの場が、実は非常に大事ではないかと思います。このようなことをさせてもらう中で、関わりが難しい子どもに対して、どのようなことを浮かぶのかとか。あるいは逆に関わることで、こちらが励まされたり救われたりすることが多い子どもに対して、どのようなことが浮かぶのかと最近では書いていただいています。皆さんでグループワークをしたりということをしています。

日頃の養育の捉え直しということで、チーム養育ということを支援者支援の観点で意識できているかということも話題にさせていただいています。最近ではこのようなテーマで施設長や職員の方々とお話することが多くなっています。

#### (10) 支援者支援学の構築に向けて

そして、支援者支援学という学問領域を構築できたらいいなという、見果てぬ夢があります。バーンアウト、感情労働、共感疲労、共感満足、二次的トラウマアティックストレス、レジリエンス、心的外傷後成長等多数の概念があります。この中で特に共感疲労に着目をさせていただいています。バーンアウトに至る前のプロセスを大事にしていくということの中で、共感疲労に着目しているところです。

支援者支援については、院生の頃、先輩から『支援者の苦慮に向き合うことで、クライアントの苦しみを実感できる』ということを知ったのを覚えています。このように支援者の側の苦労に注目したというのは、大学院生の頃でしたけれど、本当に初めてだったので折に触れて思い出して、そこから支援者支援につながっていったという思いがあります。

そして支援者支援ということで、最近、いろいろ一緒に共同開発した尺度とか使って、コロナ禍の状況における支援者支援ということもさせていただいています。支援者支援項目のなかで、上司あるいはSVによる職員のつらさ、きつさの受け止めが職員の側のつらさ、きつさを語っているということにつながっている可能性があるという指摘されています。それから、自分としてちょっとこういうことは難しいですという『限界の吐露』とも関連している可能性があります。

家族とか友人、同僚による「つらさ、きつさの受け止め」はセルフケアと関連している可能性もあります。スーパービジョン、あるいは支援者支援がとても大事であるということの例証をどう得ていくのか今後の大きな課題です。

そういう中で先ほどから申し上げるように、グループワークとか個別的な語りが、知的な理解とか技能の習熟に加えて必要ではないかということを思っています。そして、支援者支援が愛着の修復の子どもたちへの支援につながってくるということを書かせてもらっています。そして、『支援者には支援者特有の特徴があって、その支援の質を保持することが支援者支援の中核ではないか』という考えに、非常に確信を持って至りました。

共感疲労が低いグループ、真ん中、高いグループということに分かれますが、それぞれが非常に特徴がある。どこかには分かれてくということ、支援者支援の観点から見たタイプというものもあるのではと。むしろ他の人と比較しないで自分がどうなのかということを理解しながら、支援者支援を構築することが大事ではないかということです。

『柳に風タイプ』の共感疲労が低いタイプと、『横綱相撲タイプ』でがっぷり四つになる、という、それぞれが非常に特徴があると思います。その特徴が、相関が次の年とどうかということで調べましたら非常に相関が高いということで、共感疲労も共感満足も相関が高いということでした。そして、施設全体で数値が低いところから高いところに並べていくと、大体どこでやってもこのような分かれ方で、低いほうから高いほうへ非常になめらかに山なりになっています。疲労感を感じやすい人、結構感じやすいし、感じているからこそまた対応ができる人、あるいは、柳に風のような感じで対処できて解消を非常に速やかにできる人と、いろいろいらっやって、それぞれタイプがあると思います。

そしてグループ支援、組織支援ということからも考えていくことが大事であるということで、今、共感疲労と共感満足の解析の手順書を公開しています。そしてそういう中で、Tailored supports という一人ひとりに合ったサポート、それはそれぞれの組織とかにも合った Tailored supports ということを考えていくということが大事です。絶妙なバランスで成り立っているのが支援者支援なので、そこにしっかりと入って行って、そこをサポートしていくということが必要ではないかと思っています。

#### (11) 支援者支援コーディネーターと支援者支援スーパーヴァイザー

そして最近では支援者支援のコーディネーターとか、スーパーヴァイザーのことを考えていて、特にコンパッションという言葉を使っています。具体的な支援行為、共感的な行為ということでコンパッションという言葉を理解していくと、そのことができるためのコーディネーターそしてスーパーヴァイザーの存在が、職場の中で大事ではないかと思っています。おかげさまで新規、これから立ち上がる児童相談所で、この支援者支援コーディネーターを置いていただくということができました。本当にうれしく思っています。これから、支援者支援コーディネーター、支援者支援スーパーヴァイザーが広がっていくことを願っています。それぞれの定義、コーディネーター、そしてそのコーディネーターの方々を支えるスーパーヴァイザーという仕組みです。

## (12) 支援者支援ピラミッドについて

そして、図1は、支援者支援のことについてまとめたものです。

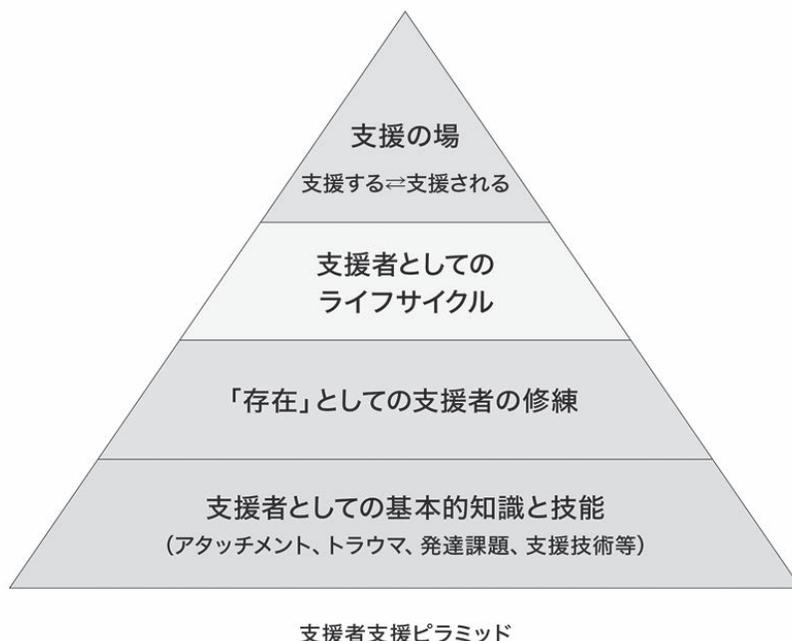


図1 支援者支援ピラミッド

### ①支援者としての基本的知識と技能

一番下に、支援者としての基本的な知識、技能、すなわち、アタッチメント、トラウマインフォームドケア、発達課題、支援技術等のことがあります。

### ②「存在」としての支援者の修練

やはり支援者としての存在というところを修練していくということは、先ほどアタッチメントの要点のこともありましたし、チームで関わるというようなことも大事になります。その存在としての在り方というところを、お互いに意識しながら尊重し合っていくということが大事ではないかと思っています。

### ③支援者としてのライフサイクル

そして最近強く感じているのが、支援者としてのライフサイクルということです。関わる子どもたちのライフサイクルのことは子どもたちと話題にすることになりますが、職員のライフサイクルも同様に、支援者支援では大事にすることになります。支援者がこの仕事をどのタイミングでどのように続けていくか、人生の長いスパンの中で、この仕事をどう続けるかということ、かなり早い時期から支援者としてサポートしていくということが、とても大事なのだということ、を最近痛感しています。存在としてのところの上に、支援者としてのライフサイクルということを入れさせてもらっています。

#### ④支援の場—支援する・されるが相互に入れ替わる—

そして一番、このピラミッドの上が支援の場は支援する・されるが相互に入れ替わるところが支援の場であると。支援しているつもりなのが、実は支援されているということは当然のことであるわけです。逆に支援しているということを思い続けていくと、非常に傲慢で思い上がったり、あるいは相手の気持ちを尊重することなく関わっていくというようなことが起こりうる。「支援する・される」ということが相互に入れ替わり、「支援の場」として成立していくということが大事なことかと思ひ、ピラミッドの一番上にさせていただいています。

#### (13) 虐待対応の3モデルについて

そしてこれは参照ということで、虐待の3モデルを提示しています。虐待は「子ども保護モデル」という基本的な、とても大事なことがあってこそであり、子どもたちの命を守っていくことでの、とても大事な側面があります。そしてそのことを未然に予防したり、あるいはサポートしたりということでの「子ども家庭支援サービス重視モデル」と、これもとても大事なことです。

そして地域で、あるいはさまざまな施設とか機関を超えて、常に「子ども中心（こどもまんなか）モデル」で考えていくということです。地域共生社会の理念が根底にあります。特に子どもの意見表明というところは、子ども中心にして全体的なシステムを構築し直す、あるいは見直すということの大きな前進につながっていく。子どもの意見表明の環境づくりということを整備しなければいけません、このようなモデル全てを包括的に考えていくということが大事ではないかと、様々な考えを援用してまとめさせていただいています。

#### (14) 同時進行してきた臨床、研究

そして、今までお伝えしてきたことと同時進行してやってきたこととして、ジャネのことと不登校、そして絵画、発達障害のこと等あります。これらもずっと一貫して続けさせていただいたところです。臨床家、研究者はさまざまなテーマを同時進行で走らせるということは、実は自分が主たるテーマだと思っているものが、思い込みがあったりとか、あるいはちょっとしたこだわりになったりすることもあります。それらを常に相対化するという意味でも、テーマは同時進行で走らせていくということがとても大事ではないかと思っています。

実は、ジャネには学部生の頃大学前の古本屋で出会ってから魅了されて以来、ずっとジャネの臨床に関心を寄せてきました。解離やトラウマ研究が発展してきた中で、改めて今ジャネに注目が集まっています。実は明日なのですが、ジャネ研究会を立ち上げるという長年の夢がついにかないました。関係の皆さまに心から感謝申し上げたいと思っています。

不登校臨床も、学部生のときに家庭教師で不登校の子どもと関わって以来、ずっと私の中でも重要なテーマです。不登校についても、ずっと関わらせていただきました。そして絵画は、ここでマンガ家になりたかった夢がつながるのですが、今も児童養護施設の子どもたちとかに関わる時には、絵画法を非常に多用させてもらっています。言葉にならないところを絵で表現することが、とても大事なことか。そして不登校については支援の道筋として発達課題、トラウマ課題、実存課題ということを、今、考えています。発達課題はいろいろな子どもたちがいる中で、その発達に即した関わりが必要であるということで、大集団の中では大変な子は小集団でとか、そのようなことが大事だと。それから傷つきからの回復というふうな意味での不登校支

援もあると。そしてこれは児童養護施設の子どもたちと関わるのが深くなる中で、やはり実存課題としての不登校ということがあるのではないかと。自分の人生はどういう意味があるんだろうかと。生きていることに意味がある、そういう人生なのかどうかということ問うということの中で、学校に行けなくなっている子どもたちがいる。その子たちに関わる時は、非常に深く深くそのテーマと一緒に考えていくということが大事ではないかということだと思います。例えばユング自身もそうでしたし、棟方志功さんとか、そういうプロセスを経ている中で、自分を信じ続けてきた方々の実存的な問いとしてとらえていくことが大事ではないかと思っています。

そして不登校支援の要点としてはプロセスで（プロセス志向）、結果である登校ではないということ。さらに、人間いろいろな面があっていいと。ネガティブな面だけじゃないポジティブな面があって、そのポジティブな面にも焦点化していくという統合的な志向です。そして自分の感性を信じ続けるという自己基準志向。そして一貫して自分にはこの人が関わり続けてくれているという自己一貫性志向を、その重要な他者から感じ取るということが不登校支援でもとても大事だし、他でもこれは援用できるのではないかと思っています。

そして、絵画法は火山表出法とか円粋感情表出法とか、いろいろな考えをいろいろな人たちから教えてもらいながら続けています。ミロとかピカソとか大好きな画家とか彫刻家の作品については折に触れて美術館には行くようにしています。いつか絵画に関する本が書きたいという（これは見果てぬ夢ですが）、絵に関しての本が書けたらと思っています。ミロもピカソもゴッホもシャガール等も一人ひとりの芸術と人生が深いので、見果てぬ夢かもしれません。

そして、子どもたちに実際描いてもらった絵では、お山の輪郭を描いた絵を見てもらって自由に色を塗ってねと。もし噴火しているとする噴火も描いていいよと言います。同じ子ども、次第に存在感のある山を描いてくれます。言葉だけの関わりではないということがあります。絵画を通して子どもたちから教えてもらっているところです。

発達障害の子どもたちへの支援もずっとさせていただいている中で、現場の職員の方々にも非常にお世話になっています。この場を借りて心から感謝申し上げたいと思いますし、実習先の施設、機関の方々にも心からお礼を申し上げたいと思っています。

### **(15) これからの研究と臨床**

そしてこれからですが、子どもの意見表明支援ということで、意見表明プログラムの構築をカナダ等での実践を参考にして行なっていく予定です。それから青少年の社会参加の支援ということで、これも国際的な観点から、日本に合った形に構築していくことも、今これから考えていく予定です。また、支援者支援のさらなるこれからの展開ということで、特に Tailored supports ということをスタンダード、そして領域固有性で構築していきたいと考えています。

以上、最終講義の機会をいただき、心からお礼申し上げます。どうもご清聴ありがとうございました。

\*本稿は、2023年2月26日に実施された筆者の最終講義の講演原稿に、見出し等若干の加筆を加えたものである。